

常任委員会行政視察報告書

委員会名	子育て文教常任委員会	委員名	横山 啓一
視察地	兵庫県加古川市		
調査事項	部活動の地域展開に向けた取組について		
視察年月日	令和7年11月12日		
視察内容	<p>1. 部活動を地域展開するに至った経緯</p> <p>少子化、生徒数の減少など部活動を取り巻く環境への対応が求められているとともに、特に中学校の教職員の働き方改革が強く要請されている現状に対し、将来にわたって子どもたちが主体的に選択し、多様な活動に参加できる機会をどう確保するかが議論されてきた。加古川市においては、先行する神戸市などの議論も参考にして、2027年8月に全ての部活動を終了することを決定し、子どもたちと地域住民がともに活動する「加古川地域クラブ活動＝かこ☆くら」（以下、「地域クラブ活動」）を新たに開始することとした。</p> <p>2. 地域クラブ活動の特徴、地域展開の進め方、取組内容</p> <p>地域クラブは、学校施設や地域の施設、資源を活用し、様々なスポーツや文化芸術活動の機会を提供する団体が、加古川市の提示する要件を満たして応募し、登録するとしており、子どもたちは校区を越えて、競技志向からレクリエーション志向まで、様々なニーズに合った団体、活動内容を自由に選択できる。また、地域クラブは会費制とし、指導者報酬や保険料等を含む運営に必要な費用は原則として受益者（参加者）が負担するとしている。</p> <p>2023年度に教職員や小中学生、スポーツ・文化団体を対象にアンケート調査を行い、子どもたちや学校関係者、保護者、各種団体の意向を調査、整理。2022年度～24年度には、段階的に様々な試行プランをモデル校・地区、全市ブロック制・拠点制等で実施。それらを踏まえ、2025年4月に地域クラブ活動に関する各種方針等を作成し、関係者への説明、教職員の兼職兼業規定の作成、児童生徒への細かいニーズ調査を行っている。また、9月には先行実施（2026年8月開始）する地域クラブ（ソフトボール、ハンドボール、サッカー）については団体募集を開始している。</p> <p>3. 「地域クラブ活動」移行に関わる課題</p> <p>地域展開について、子どもたちや保護者から一定理解されているものの、詳細が不明なことから自宅近くの活動が可能なのか、など不安感も一部あるようだ。指導者の兼職兼業については、教職員の2割ほどが関心を示しているという。各種団体や指導者の質を問う声もあり、市は募集に際して団体との面談を行い、運営体制や参加費の徴収額、経理状況などを確認、審査の上で登録することとしている。活動開始後の運営や指導等についての問題については、市が相談窓口を設置して課題解決に当たり、状況によっては登録取り消しの規定も設けるとしている。</p>		

4. 今後の展望

教員不足、進まない働き方改革など、教育崩壊の危機ともいえる状況を前に、部活動を学校から切り離すことを加古川市は覚悟を決めて進めているという。ただ、これから数年間で様々な課題が出てくることも想定している。当面は、保護者の経費負担、広域な活動による移動の課題、地域での指導者の確保など、解決しなければならない課題も多い。

5. 部活動の地域移行・展開のあり方と旭川市における課題

戦後の学校教育が向き合ってきた部活動の大転換を前に、一部の自治体を除けば、学校現場、教育行政、地域などでの議論が十分に進んでいるとは言えない。現在の部活動をそのまま地域に移行できるはずもなく、自治体による格差が拡大することも目に見えている中で、文科省や各自治体の教育行政も指導性を発揮しているとは言えない。諸外国に比べ子どもの学校拘束時間が長いにもかかわらず、様々な放課後活動を行うことが望ましいという考え方や教育課程の大胆な見直し、授業時数の削減によって時間を生み出さなければ、子どもたちのゆとりが更になくなることなど、根本の議論が行われていない。加古川市に比べ、学校数も多く、市域や校区も広域な旭川市では何ができるか、どういう方向で進めるべきか、議論が進んでいない。神戸市や加古川市のように、せめて行政が責任と覚悟を持って取り組むことが求められる。

具体的には、中体連という組織と全道・全国大会など対外試合をどうしていくか、最初から多様な受け皿を作ることがそもそも必要なのか、子どもたちの放課後をどうしていくか（学習塾や習い事などによるゆとりのなさ）、子どもの成長において学校や地域はどんな役割を果たすべきか、一斉に移行できないのであれば段階的な移行を考えるべきではないか、といった議論が早急に必要だ。

常任委員会行政視察報告書

委員会名	子育て文教常任委員会	委員名	横山 啓一
視察地	東京都武蔵野市		
調査事項	武蔵野市立ひと・まち・情報創造館 武蔵野プレイスについて		
視察年月日	令和7年11月13日		
視察内容	<p>1. 事業実施までの経緯について</p> <p>1970年代に持ち上がった武蔵境駅（JR中央線・西武鉄道多摩川線）南口の国有地（食糧倉庫跡地）の利用計画において、新しい文化センターなどの建設が議論され、2000年代に入っからは図書館、生涯学習センター、市民活動センター、青少年センターなど複数の機能を融合させた施設「武蔵野プレイス」として基本計画・設計が策定された。2005年の市長選で「むさしの改革宣言2005」を掲げた邑上新市長は計画の見直しを表明するが、基本設計の趣旨に沿った建設を求める陳情採択、専門家会議の意見、市民意見募集の結果、機能は落とさずにコンパクト化した最終計画が策定され、2007年7月に武蔵野プレイスが開館した。</p> <p>建設工事費は約37億円で、付帯工事費や図書購入費、土地取得費を加えると約71億円となった。財源は、国庫支出金16.9%、都支出金0.3%、市債33%、基金繰入金36%、一般財源は14%である。</p> <p>2. 「武蔵野プレイス」の機能について</p> <p>図書館・生涯学習支援・市民活動支援・青少年活動支援の4機能を連携・融合させた施設となっている。①図書館はプレイスの基幹機能として、特色を持つ図書フロアを分散配置させることで、様々なライフステージ、多様な利用目的に対応した滞在型の図書館となっている。②生涯学習支援は、市民の知的好奇心に応え、いつでも学べる「場」として、人それぞれのスタイルに合った環境を提供。市民や地域の教育機関・団体・企業などとの連携事業も展開している。③市民活動支援は、必要な環境の提供・情報の収集・広報支援・相談業務を行うとともに、登録団体が活用できるラウンジやプリント工房、ロッカー、メールボックスなどの整備、団体ファイルによる情報発信など、多くの市民に活動を認知してもらう工夫をしている。④青少年活動支援は、地下2階のティーンズスタジオをベースにした居場所づくりとして、様々な過ごし方ができるラウンジ、楽器演奏やダンスができるスタジオ、料理や工作、卓球、ボルダリングができるスペースを備えている。</p> <p>3. 図書館機能の分散配置、建物のデザインなどについて</p> <p>地下1階をメインライブラリとし、1階はマガジンラウンジ、2階は児童図書と健康や子育てなどのテーマライブラリ、地下2階はアート&ティーンズライブラリを分散配置している。静かな雰囲気を求めるスペース、多少声を出してもいい子どもや若者のスペース、飲食しながらくつろげるスペースなどが効果的に配置されている。年間80万人の利用を想定していたが立地条件（武蔵境駅と広場で向かい合う）や高い市民ニーズもあいまって、年間160万人の利用を</p>		

受け入れており、来館者の満足度も非常に高いようだ。

楕円形の窓が特徴的な外見だが、内部の壁面や柱、天井の角にも曲面を使い、柔らかい印象を感じる施設になっている。地下1・2階、3・4階は螺旋型の回遊階段で結ばれ、ちょっとした遊び心も感じられる。開放的な空間ながら、他の階の話し声などがあまり聞こえないのも快適さを増している。

4. 武蔵野プレイスの評価と旭川市における文化ホール建設について

様々な機能を融合させた複合施設として、よく考えられた設計のもとに建設されていると感じた。図書館を基幹的機能としながら、市民が様々な目的で訪れ、集い、時間を過ごすことができる施設としても魅力的だ。声を出してもかまわないスペースと静かな雰囲気を大切にするスペースがほどよくわかれている点も、利用者のニーズに応える要素になっている。約11km²の市域に約15万人が暮らす武蔵野市は、市民参加を掲げた先進的な自治体として知られ、住民には学者や専門家がも多く市民の意識が高いことも背景となり、市民活動が盛んに行われてきたことが、武蔵野プレイスの機能にも活かされている。

旭川市で検討され始めた文化ホールの建て替えに当たっては、武蔵野プレイスのように多くの市民に滞在してもらえる機能をどう盛り込むかが重要な要素になる。図書館を基幹機能として位置づけられるかは課題もあるが、テーマライブラリに閲覧スペースやラウンジなどを組み合わせることで、市民の来場や滞在を促すことは可能かもしれない。旭川にも様々な活動を行っている市民団体は多いが、お互いにどんな活動を行っているか目にする機会は少ない。武蔵野プレイスはそれが可視化されるような機能（オープンなラウンジスペース、外から見える研修室など）を持っており、旭川市の文化ホールにも必要な要素と思われる。武蔵野プレイスは地下2階が青少年層の優先スペースになっているが、職員も見守りながら、隠れ家的な機能もあり、また、音楽やスポーツなど活発な活動も可能な居場所として工夫されており、旭川市においても取り入れたい要素だ。

常任委員会行政視察報告書

委員会名	子育て文教常任委員会	委員名	横山 啓一
視察地	神奈川県大和市		
調査事項	大和市文化創造拠点シリウスについて		
視察年月日	令和7年11月14日		
視察内容	<p>1. 「シリウス」開館までの経緯について</p> <p>図書館、芸術文化ホール、生涯学習センター、屋内こども広場の4施設を中核にした文化創造拠点「シリウス」は、2016年11月に開館した施設。2009年度の第8次総合計画の個別目標「大和の文化を守り育てる」に（仮称）芸術文化ホールの建設に向けた検討を進める旨が盛り込まれ、事業がスタートした。南北約9km、東西約3kmの市域のほぼ中間に位置する大和駅は、相模鉄道・小田急電鉄が乗り入れる交通結節点で、その駅東側地区の再開発と併せて建設が議論されてきたが、結果的には市有地に民間が建物を建設し、市がテナントとして入る形となった。</p> <p>2. 建設方法、予算、運営などについて</p> <p>シリウスは、民間の再開発組合事業で「YAMATO文化森ビル」として建設されており、シリウスの工事費（組合としての支出）は165億円で、市負担は147億円（うち国庫・防衛補助金約40億円、地方債約79億円、一般財源約16億円）。</p> <p>他の市有施設6館も併せて運営している「指定管理者やまとみらい」は、（株）図書館流通センター、サントリーパブリシティサービス（株）、（株）小学館集英社プロダクション、など民間6社の共同事業体。事務局は3名だが、月1回の連絡会議や研修で事業体としての意思統一も図っている。</p> <p>3. 「シリウス」の機能や特徴について</p> <p>1階は大小2つのホールとギャラリー、2階は市民交流フロア、3階はちびっこ広場など子どものフロア、4階は心身のリフレッシュや健康について考えるフロア、5階は図書館としての中核機能、6階は生涯学習活動に対応する会議室や交流スペースとなっている。さらに、各階にはそのテーマに合わせた図書館・図書コーナーと閲覧スペースも配置されている。そのほか、市連絡所（証明書などの発行事務）や観光協会、保育室、FMやまと、音楽練習用のスタジオなど様々な機能を効果的に組み合わせた複合施設になっている。文化ホールは、隣接する自衛隊厚木基地及び相模鉄道の騒音がホールに漏れてこないよう、「ボックスインボックス構法」を取っている。各施設の稼働率は90%を超え、平日でも多くの若者から高齢者までが利用していたが、大和駅からシリウスまでの歩行者道路に商店街が並ぶなど、市民が通行する拠点にもなっている。</p> <p>4. シリウスの評価と旭川市における文化ホール建設について</p> <p>約27km²の市域面積に約24万人が暮らす大和市にけるシリウスは、鉄道の利便性や市の南北を</p>		

繋ぐコミュニティバス運行によっても、高い拠点機能を発揮している。図書館がメインでもありながら、明確な目的がなくてもちょっと寄ってみるかと思わせる多様な機能も合わせ持っている。運営事業体としての民間業者も、高い専門性を持つ企業が顔をそろえており、首都圏における優位性を十分生かしていると感じられた。

一方、旭川市で検討され始めた文化ホールの建て替えに当たっては、大和市とは全く異なる条件の中での議論が行われなければならない。すでに建設予定地は確定したが、統合する様々な機能を考えると、それが最適かという疑問も残る。またシリウスは、図書館機能が効果的に分散配置されており、それが市民利用率を押し上げていると思われるが、旭川市ではその部分をどうするか、図書館に変わるような機能を盛り込んで市民の滞在率や稼働率を上げられるのか、など、様々な議論が必要だと認識した。